

ことばを聴くことから始めるデザイン演習の可能性

～オンデマンド・ラジオで図解を学ぶデザイン演習を事例として～

A Potential of Beginning the Design Practices by Listening to Voices

- As a Case of Learning Information Graphics on On-Demand Radio Design Practices

横溝賢¹⁾ 原田泰²⁾ 宮田義郎³⁾ 三河侑矢⁴⁾ 佐藤あみか⁴⁾ 樋口涼佳子⁴⁾

Yokomizo Ken¹⁾ Harada Yasushi²⁾ Miyata Yosiro³⁾ Mikawa Yuya⁴⁾ Sato Amika⁴⁾ Higuchi Rikako⁴⁾

1) 札幌市立大学 2) 株式会社デザインコンパス 3) 中京大学 4) 札幌市立大学 大学院デザイン研究科

Abstract: It is thought to be a principle to find an essential solution to design. However, with the remoteization of classes, learners began to use the video and audio mute function. As before, it has become difficult for students to run classes that learners are trying to see and what they are trying to understand. And in the remoteization of classes to learn illustrations, I decided to try

Keyword : Narrative Based Learning, On-Demand Learning Design, Reflect in Learning

on-demand radio that shifted from “seeing and responding” to “talking and listening”. As a result, there were many learnings in the works of radio classes that express from introspective questions compared to face to face. In this article, we will analyze how these “enter from listening to words” learning attitudes appear in the work and examine the impact of radio classes on learners.

1. はじめに

「やって・みて・わかる (須永, 2015)」行為は、デザインの本質的な解を見出す原理であると考えられている [1]。デザイン技法を教える授業者も、学習者の様子を見て個別に表現の意図を問いただすことから、自分の「こと」を内省する学びを促してきた。しかし授業のリモート化を境に学習者が映像・音声のミュート機能を使うようになり、授業者はこれまでのように「学習者がやってみている〈のを見て〉・わかって」としての〈のを見て〉授業を運営することが困難になった。筆者はこの「見えない」ことのもどかしさを感じ、これまでの授業運営が「見る」ことに依存していたことに気がついた。そして、図解を学ぶ授業のリモート化において「見る」ことから「語り聴かせる」ことにシフトしたオンデマンド・ラジオを試みることにした。その結果、ラジオ型授業 (以下、ラジオ) の作品には、対面に比べ、内省的な問いから表現していく学びが多く見受けられた。本稿では、こうした「ことばを聴くことからはじめる」学びの態度が、制作物にどのように現れているのかを分析し、ラジオ型授業が学習者に与えた影響を考察する。

2. 授業の概要

本研究の題材となる授業では、物事を理解するための図と、伝えるための図解技法を学ぶ。この授業は、2019年に八戸工業大学2年生を対象に対面で実施。2020年-21年にリモート化し、札幌市立大学2年生を対象にオンデマンドで実施した。対面、リモート共に、毎回授業時間内に終えられるプチ課題を用意した。対面時のプチ課題は作図を学習者同士で見せ合うことから表現技法の省察をするようにプログラムしていたが、リモートではラジオの聴取を通じて作図-省察を独りでこなえるように課題をつくりなおした。リモート化で残った対面時課題は表1●印の4種となる。対面では、課題の説明が掲載された専用の課題シートに手書きで図解する方法で演習をおこなった。一方、リモートでは、筆者自身の課題実践の語りをラジオ形式で配信し、配信と同時に実践プロセスの記録をブログに公開した。学習者はラジオを聴いて課題制作の要点

表1 対面 (左) とラジオ (右) で実施したプチ課題プログラム

週	2019対面プログラム:プチ課題/活動内容	週	2020.21.ラジオプログラム:プチ課題/活動内容
1	01: 内省エクササイズ ●	1	01: アイコンデザイン ○
2	02: 身の回りのブランドロゴを描く ×	2	02: 情報デザインが必要な理由考察ノート ○
3	03: 喜怒哀楽アイコンデザイン ●	3	02: 情報デザインが必要な理由考察ノート ○
4	04: 私のプレゼント体験を図解する① ●	4	03: 線を描くエクササイズ ○
5	04: 私のプレゼント体験を図解する② -	4	04: 一筆書きIn&Out ○
6	05: AはBよりも優位の関係を描く ●	5	05: バリエーションと共通性 ○
7	06: 点がつくる線や形を描く ◇	5	06: 内省エクササイズ ●
8	07: 絵を言葉で説明する ×	6	講評会 -
9	07: 絵の意味を言葉で説明する ×	7	07: 喜怒哀楽アイコンデザイン ●
10	07: 絵の意味を言葉で説明する ×	7	08: わたしの嬉しいプレゼント体験 ●
11	11: 新聞記事を図解で表現する① -	8	09: AとBの関係 ○
12	11: 新聞記事を図解で表現する② -	8	10: AはBよりも優位の関係 ○
13	11: 新聞記事を図解で表現する③ -	13	15: 青空文庫・短編の物語構造化 ○
14	11: 新聞記事を図解で表現する④ -	14	16: LATCHを使った情報整理 ○
15	図解作品展示 -	15	講評会 -

● 対面時と同じ課題 × オンライン化で無くなった課題

○ 新たに加わった課題 ◇ オンライン化で修正された課題

を把握し、ブログを補足的に参照しながら、自分の方眼紙ノートに手書きで図解制作に取り組んだ。

2.1 ラジオで演習するための仕組みづくり

ラジオ型授業は2つのサービスを用いて実現した。1つ目はウェブブラウザから音声コンテンツを聴ける音楽配信メディア SoundCloud。2つ目は SoundCloud で配信するプチ課題実践プロセスの解説をテキストと画像を組み合わせで紹介するメディアミックスブログサービス Tumblr。この2つのサービスを使って学習者がスマートフォンと紙とサインペンがあれば時と場所を選ばずにデザインを学べる授業の仕組みづくりをおこなった。

3. ラジオ型授業が学習者に与えた影響の分析

本章では、対面とラジオの双方でおこなわれたプチ課題作品の比較分析を通じて、ラジオ型授業が学習者の学びに与えた影響について考察する。分析試料には「内省エクササイズ」の作品を用いる (表1)。内省エクササイズとは、自分のお気に入りのものを選び、そのもののどこに愛着を覚えているかを省察することから、ものを介した自己と社会や生活世界との関わりを理解する演習課題である。

3.1 プチ課題に取り組むための段取り

図1は筆者愛用の林業ジャケットを内省した図解事例である。対面では図1をプロジェクションして取り組み方を解説した。

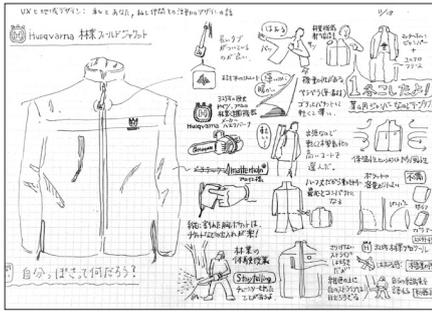


図1 筆者による内省エクササイズ事例

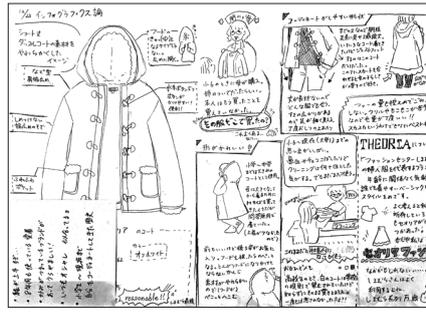


図2 対面での内省エクササイズ作品



図3 ラジオでの内省エクササイズ作品

一方ラジオでは「なぜ、どのようなところがいいのか？」という林業ジャケットへの愛着の WHY を、学習者（リスナー）一人ひとりに伝えることを意識して語り聴かせていた。ラジオで語った内容の一部を下記に紹介する。

「今回のエクササイズのお題は『自分っぼさってなんだろう』です。まず、自分のお気に入りの服や愛着のあるものを1つ選ばう。選んだらその服、そのものがなぜ自分にとって大事なのか？について描きだしていきましょう。（中略）ぼくは、八戸で山に入って林業やってみるというデザイン授業をやっていたんですよ。それでね、林業機材を販売する八戸のお店で発見したのがこのジャケットです。このジャケットは出会った時「なんか自分っぼいな～」と思った。（中略）なによりいいなと思ったのはこの生地ね。防寒・防風なんだけど、単一素材で薄いのに暖かくてなおかつ軽んだよね。だから、ぱっと羽織ってぱっと動ける。この服を着ればそういう自分の機動性を表現できると思った…」

3.2 課題作品の比較分析

学習者は図1の制作事例の解説を聞いた後、内省エクササイズに取り組んだ。図2は対面授業の作品である。この学習者は、その日着用していたダブルコートをお気に入りの物に選んだ。その内容を見ると、紙面の左側にコートを描き、そこにショート丈、水牛ボタン、ふかふかポケットなどコート細部の特徴について描いている。そして紙面の右側に小学校6年生の時に母が買ってくれたこと。Mサイズのおかげで現在も着用できていること。素材が柔らかいのでフードを被ると頭頂部がぺこっと凹んで可愛いことなどを詳述している。愛着の要因を濃やかに描いているが、図には自分ばさという問いに対する省察的記述がない。一方、図3はラジオの受講者による作品である。この作品はサラダ記念日（著者・俵万智）がなぜ好きになったのかその体験を省察的に描いている。まず、見出しが「出会った時思った。私が好きなのはこれだったのか。」と記しており、学習者自身の内省的な問いかけが見られる。では具体的にはどこが好きなのか。その問いへの応答として図には「何げない日常」で満たされたコップが描かれている。そこに〈切なさとかさ〉のココロ・キブンを注ぐ。すると、日常が純粹できらきらする風味に変わる。その変化を味わえるようになった。俵万智の短歌を詠んで、自らの日常の見え方も変わった。その変化のプロセス

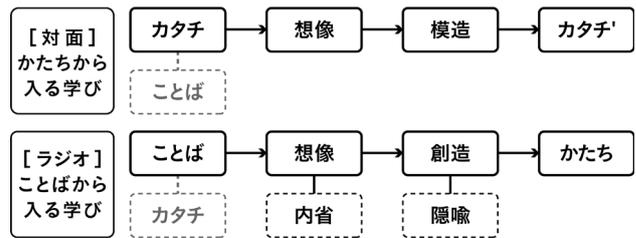


図4 〈かたちから入る学び〉と〈ことばから入る学び〉の違い

を図解している。この学習者は自己の見えを変化させた体験レシピを図解することで、自分らしさを表現しようとしている。つまり内省エクササイズのポイントは愛着の理由を描くのではなく、内省化の問いかけのプロセスを描くことにあったことに気づき、筆者はこの作品を高く評価した。

4. 考察とまとめ

対面の学習者12名のうち11名（91%）がその日着用していたコートやジャケット等のアウターの特徴を描いていた。11名の学習者らは図1を見本の型として、模造することが課題制作の目的にすり替わっていたと考えられる。一方ラジオの学習者でアウターを描いたのは155名中39名であった。その中には図1の影響を受けていない学習者もいると考えられるが、残りの106名（68%）は、自分の問いをもってお気に入りのものを探ることから課題をはじめていたと言える。2作品の比較分析から、対面の学習者は最初に筆者の事例を見て、図の〈かたち〉を確認し、その「型」を模造することから内省の描き方を学ぶ活動になっていた（図4・上）。一方、ラジオでは、はじめに筆者の語り〈ことば〉を聴くことから促した。それにより、学習者は自分の「こと」にむきあった問いを立て、自己の経験や個性を隠喩的に図解することの意味を学ぶことができたと考えられる（図4・下）。

以上のようにラジオは内省化に適したメディアであるが、授業者が呈示する〈かたち〉がどのような問いかけから生まれたのかを語り聴かせることにより、その属人的な「問いかけかた」に学びの関心が向き、見ることに依存した環境でも学習者の内省的な学びを支援できる可能性があると考えられる。

参考文献

- 1) 須永剛司：芸術のデザインからデザイン学を展望する、計測と制御 第54巻 第7号, 462-469, 2015